
逃げ道

K2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃げ道

【Nコード】

N8585C

【作者名】

K2

【あらすじ】

毎日のように罪人を斬っていく仕事それをこなしていく17歳の光来「みつき」彼の思うことは・・・？

罪と言う名のついた人間を斬った。

斬って、斬って、どれだけ斬ったろう・・・？

どれだけ見て、どれだけ

あびたろう

真っ赤な血を・・・

そして、今日もまた・・・

—光来—

「や・・・やめてくれっ！死にたくない」

「お前は、”罪”という名のものに手を出した」

「そっそれは、はめっ・・・ぐはっ」

ドサッ

カタン・・・

最初からわかっていたことだろう

最後には、こうなると

刀を鞘に収める。「あっ！いた光来隊っ・・・

「ごめん・・・後 片付けといてくれ」

「はい」

汚れた・・・

俺は、赤くなった手と団服を見つめる。

もう 慣れたことか・・・罪を犯した者は、誰であろうと関係無い。

ただ・・・斬る。

だけど、たくさんの数えきれないほどの人を斬った俺は、・・・”

罪”では、ないのだろうか？

「光来っ！」

いきなり、名前を呼ばれ振り向く

「沖田さん」

「お前、勝手に居なくなるんじゃない」

「すいません」

「今日は、引き上げるぞ お前もひでエカッコだしな」

「はい」

彼は、沖田夕「おきたゆう」 今でいう警察のような仕事をしている俺ら団の団長だ。

「貸せ ジャケット」

「え？」

「いいから」

俺が血のついた団服のジャケットを脱いでわたす。

「コッチ 着てろ」

そう言って 沖田さんは、自分の団服を俺に持たせる。

「コレ・・・沖田さんの」

「俺が着てろって言ってんだからいいんだよ」

「はーい」

沖田さんの団服を着る。

「デケエ・・・」

「それは、お前が小っせえからだろ」

「俺は、小っさくねえ」

「俺からすりゃ小っせえの」

172センチメートルの俺と180センチメートルの沖田さん。

確かに、背は、俺のほうが小さいけど8センチメートルじゃん・・・

・

「俺のが17だから若いですよ」

「アホか 俺も25だから若いんだよ それに、お前は若いんじゃないってガキ」

「ガキじゃ・・・あぶねえ」

沖田さんの顔が近づいてきて、俺は、とっさに自分の唇を手でおおう。

「・・・なんで、キスさせないんだ？」

「後でそのへんの一般市民から苦情がくるじゃないですかっ！ 団服着てるのに」

「見てねーよ」

「見てますって 早く帰りますよ」

ハァー疲れた

俺は、頓所の自分の部屋で団服から着物に着替える。

沖田さんに返しにいかないと・・・

部屋を出て 沖田さんの部屋にむかう。

「あっ 矢吹「やぶき」」

「光来隊長？ 何ですか？」

「さつきは、処理ご苦労だったな」

「いえ それより よかったです」

「なにが？」

「団長 光来隊長がいなくなったって言ったらすっごい不安な顔して すぐに走って捜しにいったんですよ」

「あの人が？」

「はい で、見つかった時は、安心した顔してました」

「ふーん あの人が・・・ね」

「あっじゃあ俺これで」

「おう」

ペコツと頭をさげて 去っていく。

矢吹は、俺より歳が1コ上だ。だけど 敬語を使うのは、俺が隊士の中で、隊長をしていて、矢吹は、隊士の中の1人だから。

ー沖田ー

「報告 ご苦労だった もう退いていいぞ」

矢吹が俺の部屋で今日の報告をしている。

「光来隊長って強いですよ、俺より歳下なのに、隊長なんて位について、任務をこなして」

「アイツは、強くねえよ団の中で、1番歳下だから足手まといにならねーようにガキらしい物、全部、押し殺してるだけだ」
所詮ガキなんだよ・・・

「言っただけじゃないんですか？お前は、荷物になんかなくていいって、弱音吐いたっていいって」

「んなもん、自分で気付かせるべきだろう」

「そうですけど、言っただけじゃないとわからない事だってあります
光来隊長なら尚更そうです

すいません、口が過ぎました」

「いや、お前の言うとうりかもな・・・」

「矢吹」

「失礼しました」

・・・大丈夫かな

だけど、きっと、光来隊長が弱音吐いたり出来るのは、団長だけだ
と思うから・・・

「光来と沖田」

「失礼しまーす、沖田さんコレありがとうございます」

「光来、そこ座れ」

「説教なら身に覚えがありません」

「いいから座れ」

渋々、指定された所に座る

「何ですか？」

「光来、辛いなら辛いって言えば、辞めたいならこの仕事辞めてもいい」

「ふざけんなっ！俺は、辛いとか一言も言っただけ」

「隠してるだろう　だから無理にしないでいい、辞めたいなら辞めたって・・・」

「なんで、そんな事言うんですかっ！俺がいらないからですかっ！？」

俺には・・・コシカネの・・・」

怖い・・・何が？・・・

「光来」

「離せっ俺は、アンタなをかつ・・・」

俺は、光来を抱きしめ、優しくキスをする。

「誤解するな、俺は、お前が大事だから言っただけ！お前が辛そうなの、見てるのは、キツイ・・・」

「だけど・・・」

「お前が辞めたって、みんな責めたり、離れたりしねえよ」

わかった・・・1番怖かったのは、アンタから離れる事・・・

「傍に居たい・・・アンタやみんなの傍に・・・」

「それじゃあ　今度からは、ちゃんと言いたい事は言え　続けられるように」

「沖田さん、もし、いくとこねーのに俺が仕事辞めてたらどうしたんですか？」

「そんなの決まってるだろ　俺がかってやるよ」

「何プレイですか？」

「ばあか　何がプレイだっ」

「だって、プレイでしょう　かってやる　なんて」

「あーもうウルセー寝ろっ」

「はいはい」

その夜は、沖田さんがずっと抱きしめてくれた　逃げても　アンタと一緒にいられるなら、
がんばれそうだ。

終劇

(後書き)

最後まで読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8585c/>

逃げ道

2010年10月10日03時01分発行